

大正大学蔵『源氏物語』と仏教

研究生 首藤 卓哉

大正大学蔵『源氏物語』（以下、大正本）は、「寄合書」で、各巻に貼付されている極札に依ると、約四十名によって書写されている。書写者には、實相院増運大僧正、大慈院大僧都などの僧、また、天台座主が三名も名を連ねている。梶井宮堯胤法親王（天台座主一六一世）、外題を書いた青蓮院宮尊鎮法親王（同一六三世）、梶井宮應胤法親王（同一六五世）の三名である。このように、極札に書かれた人物に注目すると、大正本は天台宗と密接な関わりがあると考えられる。

前年度の発表では、書写者の一人である姉小路中納言基綱卿に注目し、基綱と天台宗、そして大正本との関わりへ言及した。

また、同時に一条兼良が著した『源氏物語』の注釈書である『花鳥余情』が、それまでの注釈書とは一線を画し、『源氏物語』を解釈する上で、方便品などの天台教学を用いて解釈していることに触れ、当時の『源氏物語』に関するサロンでは、天台教学の知識が必須であり、そのような観点から、大正本には、単に能筆家というだけでなく、天台教学の知識を持った人物が書写者として入っているという見方もできることを述べた。

本発表では、基綱が記した『禁中御八講記』（以下、『御

八講記』）の極一部であるが、冒頭部分に触れ、基綱の天台教学に対する知識の深さを、前回の発表とは別の観点から確認した。

『御八講記』は嘉樂門院の三回忌に当たって行われた法華八講について、基綱の手によって書かれたものである。法華八講についての詳細を伝えるものはいくつかあるが、『御八講記』も、こと詳らかに内容を記しているものの一つである。しかしながら、種々の仏教事典などでは、概要はわかるものの、しっかりとした現代語訳や解釈がなされているものがないのが現状である。

そこで、『御八講記』について書かれていることを詳しく調査、考察し、解釈や現代語訳を立ていくことにした。『御八講記』に書かれている内容から、基綱の天台教学への造詣の深さが確認できる点、また、内容に大正本の書写者である「富仲阿波守」などがみられるからである。

大正本の書写成立は、不明な点が多く、その経緯もはっきりとはしていない。基綱は大正本の発起人、もしくは、それに近い中心人物であったと考えられる。よって、基綱の人間関係を明らかにすることは、大正本の書写者の関係を明らかにすることに繋がり、ひいては、大正本の成立の解明にも繋がると考えられる。

本発表は、冒頭部の一段目のみの解釈であるので、全てを断定するわけにはいかないが、法華八講の根底には、親のことを大切に思うという、儒教的な思想があるのではな

いかと考えられ、その旨を、冒頭により述べていると解釈できそうである。また、応仁の乱によって法華八講の詳細が不明になってしまったが、そのような状態の中でも、法華八講の起源を記している点から、基綱が天台教学の知識が豊かであったことが垣間見れることが確認できた。